

物語のはじまり

「そんな、バカな！」

敵対する2人が、同じ言葉を叫ぶ。新しい姿に変わった王女の姿は美しく、気高く、そして凶暴に見えた。つやめくウロコはイチゴの絞り汁を混ぜた、ミルクのような色。切れ長の眼の奥で燃える、暗い炎を宿した瞳。身軽で、巨大で、恐ろしい立ち姿。龍、龍だ。

王女をこんな姿に変えたのは、老魔女フィニステラの呪術だった。

偉大なるロング・ナリク国の王女は、恋をしていた。その相手は「憂国の騎士」と呼ばれている、若く誠実な国の騎士だった。2人のあいだに障害はなかったが、父王の命により、大つばらに宮廷内で逢瀬を重ねることはできなかった。王女を妻にと願う他国の思惑に対して、もう少し父王は気を持たせておきたかったのだ。

そこで王女と騎士は、王都の外で密会を行っていた。七曲谷と呼ばれる、美しい谷。静かで人が来ない、自然の力を感じる場所。左右を急峻な岩壁に挟まれた土地で、有事には天然の要塞として国民が避難することもあった。

ふたりきりの時間は、若い恋人にはなによりも尊い。だが、その日には、睦まじく紡がれる時間に割り込む不屈きな老婆がいた。

その老婆は、いつの間にか立っていた。大きな岩の陰に半身を隠すようにして。黒いローブ。曲がった背。ゴツゴツした杖をついていた。鼻は醜く曲がっていて、顔はしわだらけ。

「やっぱりね、ウワサは本当だった！ ローリーのやつを、褒めてやらなきゃね！ あの臆病なでぶ助も役に立つことはある！」

王女と騎士。身分の高い2人が目の前にも関わらず、老婆にはひとつも臆するところがない。それどころか、愉悅に満ちた表情を浮かべながら、指を動かしている。

なにかまずいと、騎士は思った。

「ウサギかね？ ネコか？ 小動物に変わったら、すぐに捕まえてやろうね」

魔女は楽しそうに笑った。笑いながら杖を振った。きらめくひと筋の軌跡が、王女にぶつかって消えた。

「王女よ！」

護衛の騎士が、叫んだ。魔法の理しりをまったく知らない騎士に、まじないを防ぐすべはなかった。騎士は王女の恋人だったが、彼にできることはせいぜい、王女に呼びかけることくらいだった。あつという間に、王女の姿がよじれていく。魔法だ！ ウサギ？ ネコ？ 小動物になるだって？

ああ！

騎士は魔女の言葉を信じて、嘆いた。

魔女は嘘をついたわけではない。じっさい、魔女の頭のなかでは、王女は小さくて無害な生き物になるはずだった。というのは、魔女はこのまじないについて、母親からこう聞かされていたのだ。

「かわいい女にかければ、小さなネズミやリスに。小悪党にかければ、コウモリやカラスに変える術」

だから魔女は、そのまじないを王女にぶつけたのだ。だが、魔法というものは、その本質を正しく捉える者には、大きな力となる。だが、本質を見誤るものが行使すると、思いもよらぬ事態を引き起こす。

魔女は間違えた。魔女フィニステラが唱えた呪文は、かけられた者の姿を、その性質に応じたものへと変えるものだった。その者にふさわしい姿へと、「正しく」変容させるものだったのだ。

「そんな、バカな！」

巨大な金に身を寄せながら、魔女が叫ぶ。老婆はすぐに、これが王女の本性なのだと思悟る。きらびやかな外見で人を惹きつけながら、その本質は激情。渦巻く炎のような、激しい気性。

老魔女フィニステラが使える呪文は、あまり多くはない。変容の魔法と大金魔術など、いくつかの呪文を知っているだけだった。彼女はその数少ない呪文のひとつを使うことに決める。大岩をくり抜いてつくった大金をひっくり返して、その内側へと滑り込む。土ぼこりがあがって、それがやむと、



そこにあるのはただの岩だ。怒り狂った龍が魔女を追って、鋭いかぎ爪を岩に食い込ませる。ミシミシと音がして、岩は石片となって散る。魔女の姿はどこにもない。龍は怒りの声をあげる。

恐れとともに、騎士は龍を見上げる。自分は今から、この龍にバラバラにされるのだ。そんな恐怖の感情が、心を捉える。王女は龍となった。変わってしまったのだ。

王女は混乱していた。突然あらわれた魔女は、自分を別の生き物に変えてしまったようだ。事態が呑み込めず、叫び声をあげてしまった。こわばった表情で、自分を見つめる恋人。混乱している自分に、声ひとつかけてはくれない。それどころか、今から殺されてもするかのような顔で、こちらを見ているではないか！

王女は悲しみにくれた声を出しながら、しおしおとその場にくずおれる。

しおれる龍を見て、騎士は感じ取る。この龍の内側には王女の心が生きている。即座に駆け寄って、騎士は声をかける。甘えるように龍は、騎士に頭をこすりつける。

この冒険の目的は、龍を王女の姿に戻すこと。ときに騎士、ときに龍として行動を行い、龍を王女に戻す方法を見つげるための旅に出る。

だが、どうすればいい？ 1へ。

1 冒険のはじまり

王女と騎士が魔女に襲われたのは、七曲ななまがと呼ばれるうねうねと曲がった狭い谷あいだ。人目を忍んで逢うために2人が来る場所だ——人里からは離れている。

いつまでもここにとどまるわけにはいかない。ここから出て、龍を王女に戻す方法を探さなければ。そのためには、魔女の足どりを掴むのが手っ取り早いだろう。

騎士は魔女の住み家を知っている。「大釜の塔」と呼ばれる、荒野の真ん中に建つ古い廃墟だ。そこに向かおう。

どうやってたどり着くかが問題だ。まずは、七曲谷の終わりにある深谷の吊り橋まで行くことになる——そこに至る道は3つある。

ひとつは七曲峡谷の谷あいだ。もとも一般的な道で、安全度も高い。だが、途中でシスル・メノール村という、中規模の村を通り抜けなければならぬ。

ひとつは、大ヤギ山地。谷の斜面を登る、急峻なルートだ。過酷だが道幅は広い。山地に生息する大ヤギは熊なみに大きく、つよい。これに出会う危険が懸念される。

最後のひとつは、リオーマの坑道。数百年前にドワーフによってさかんに採掘されていた坑道だが、すべての道が龍でも通れるほど大きく広いかどうかは分からない。